さんえんキャンプ

関東研究会で１位を獲得

利用者、職員、学生に3方良しの体験を

特別養護老人ホーム草花苑（あきる野市草花）と栄光の杜（日の出町平井）は合同企画「さんえんキャンプ」の取り組みについて、9月8～9日に新潟市で行われた関東ブロック老人福祉施設研究総会の「介護人材の定着・確保・処遇改善に関する取組」に関する部門で発表した。審査の結果、全8事例の発表中、見事1位の評価を得た。これにより来月17、18日に高知市で行われる全国老人福祉施設研究会議への推薦が決まり、同会議で発表する。第1回から実行委員会をサポートしている草花苑の奥平隼人さん（35）と栄光の杜の加藤段さん（41）の中堅職員2人に話を聞いた。（小澤）

左から奥平さん、加藤さん、岸野さんらキャンプスタッフ

―別の法人が共同で企画を行うメリット、デメリットは？

加藤　もちろん苦労する面は多々あるが、別法人と取り組むことで別法人のやり方、価値観の違いを学ぶことができる。施設に関係なく個々の利用者について話し合うことができ、得るものが多いのではないか。

奥平　複数の法人でやることで、1施設の取り組みではなくて、介護業界として取り組んでいるということをアピールしたい一面もある。企画を通して職員が、やり遂げた達成感や利用者の思い出に触れることで得た感動を仕事場に持ち帰って来てくれる。施設内でもより利用者を思いやった対応が見られるようになり、人材育成効果のある企画になっている。

―キャンプを体験した利用者から、どのような反響がこれまで見られたか。

奥平　利用者にとっては、施設内の生活はストレスのかかるものだと思う。自宅、かつて勤めた職場や地域を巡る企画を多く実行した。利用者もその家族もとても喜んでくれている。利用者は思い出を想起し「来てよかった」「今後の生きる糧となる」という声を聞くことができた。

3年間で70人以上の学生が参加した

加藤　企画はほんのひと時のことかもしれないが、施設に戻った後、生活する意欲が湧いてきてくれればいい。それだけでも意義のある取り組みだと感じる。

―学生の反応は？

奥平　通常の実習は記録に追われるが、このキャンプは特にそういった縛りがなく、利用者と密に関わっていくことを大切にしている。この経験を通じて、学生は就職前に介護に対するイメージを改めて構築してくれている。

加藤　「介護って、おもろいな」と思ってもらって、業界に入って来て欲しい。

―介護のイメージを変えるために業界としての問題、課題は何か？

奥平　真面目な学生もいる一方、ここ数年、学生の質が低下していると個人的には感じている。高校3年の進路選択時「やることがないからとりあえず介護関係に進む」といった意欲の低い学生が増えているという話も介護関係の学校の教諭から聞く。進路を担当する際の現場のイメージを改善してもらうために、大学、専門学校生よりも下の世代、特に高校や高校生へのアプローチが重要だ。

加藤　小学校、中学校では、福祉施設でのボランティアを推奨しているが、高校段階で福祉介護業界が敬遠されているのが現状。「介護のイメージ」を変えることがこの企画を続ける意義だ。仕事は大変かもしれないが、やりがいや面白さがあるということを若い世代にしっかりと現場から伝えていきたい。

この国の少子高齢化はさらに進む。高齢者にもっと若者が関心を持たなければならない。若者が関心を持つからこそ、高齢者から「若者を支えなければならない」と思えるようになり、互いにとってより良い社会になってほしい。

全国会議で発表へ

利用者と接する学生スタッフ

草花苑、栄光の杜 合同企画

「さんえんキャンプ」は草花苑と栄光の杜の2つの特養施設（初年度は増戸ホームも参加）が2015年から学生の夏休み期間に行っている取り組み。自らの意思で外出することの少ない利用者を、本人の希望する場所へ連れて行くことで思い出を作り、元気を出してもらおうというもの。

実行委員会を20代若手職員を中心に組織。介護・福祉系の専門学校、大学などの学生に参加を呼びかけ、職員や利用者に随行することで「介護の魅力」を実感してもらうのがねらいだ。実行委員会は大学、専門学校15校を訪問し、3年間で説明会に250人、企画に学生は77人が参加した。

昨年は東京都社会福祉協議会が開催した「アクティブ福祉in東京16」で実行委員長賞と福祉保健局長賞を受賞した。関東ブロック研究総会で1位を受け、今年度の実行委員を務める岸野隼士（はやと）さん（29）は「どこで発表しても、評価してもらえる企画を自分たちが動かしているんだなと思うと、改めてやりがいと達成感を感じている」と話した。